



Title	日本語可能構文の統語語用論的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	李, 娜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15118号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86466
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Na_Li_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 李 娜

審査委員	主査	教授	加藤	重広
	副査	教授	李	連珠
	副査	准教授	野本	東生

学位論文題名

日本語可能構文の統語語用論的研究

日本語における可能の表現は、文法や統語論の観点から見ても昇格と降格を伴う構文を生成し、意味的に見ても単なる「可能」とは言えない用法があり、語用論的に見ると禁止や提案、依頼や要求のほか、謙遜のスタンスといった運用もあり、複雑な現象とすることができる。しかし、意味用法の差異に早くから着目した方言文法で能力可能と状況可能に二分することが提案されてからは、掘り下げた研究は多くなく、近年の語用論の成果を活用した分析はほとんど見られないという状況にある。本論文は、統語・文法から意味・情報構造、さらに言語行為論を中心とした語用論といった多角的な検討を加えた論考とすることができ、先駆的な労作として高い評価に値する。

「合格しました」と事実を報告・叙述するような場面で「合格できました」と形式上過去の可能状態として叙述する発話は日本語では珍しくなく、むしろ、後者の方が謙虚さを仄めかすことから運用上選好される。意味差の記述は従来から見られるが、十分な原理的説明が欠けたままであった。加えて、レル・ラレルが可能以外に尊敬・受動・自発の用法を持つ助動詞であること、「食べラサル」などのサル形、「よう食べん」と「食べられん」の対立、「食べきらん」、「食べるにいい」などの方言的差異があることなど、また、文法論・意味論・語用論で分析するために踏まえておくべき先行研究の膨大さが研究の支障にもなっていた。それらを考慮しても、運用能力が高いとは言え、日本語を母語としない申請者が微妙な差異のある用例を細かに分析して研究を完成させた点で研究上の貢献があると認めるのが妥当であろう。

本論文は、言語行為論、推意に関するグライス系語用論、共通基盤や演繹的文脈論を含む文脈に関する枠組み、ポライトネス理論の新旧の差異を踏まえた社会語用論の知見など、地道に先行研究を理解して必要なあたりにまとめ直して分析に活かしている。特に推意の特性のうちでも、無効化可能性に着目して勧奨や弱い要求のような解釈が取り消されて、単なる属性叙述に後退させる例（「この入り口から入れますよ」が「入るといいですよ」「入ってください」から「入ることが可能です」の意に転じうる）などを取り上げて、可能表現の使用がすぐれて語用論的に検討すべき課題であることを明らかにしている。

可能の表現は、主格の降格のほか、対格の昇格などを生じさせる構文転換の能力を有しており、それらが入り交じって顕現することもあるため、格パターンの分析は複雑で整理にくい。しかし、本論文では、いくぶんか簡略化しながら、いくつかの格パターンに類型化して記述して、分析している。これによって「太郎がフランス語が読めること」のような多重主格が可能であることや、「太郎にフランス語が読めるのか」のように、降格と昇格が同時に生じる構文などが記述され、さらにどういった制約と選好があるのかも明らかにすることができた。

さらに「30分経過するまで退出できない」のように禁止の解釈になるものや、「私、代わりにそのシフトに入れます」のように申し出や提案の解釈になるものを、言語行為論の類型に加えてポライトネス理論の観点からポライトネスのストラテジーとしての機能を割り当てて、説明できるように記述している。このように、本論文の価値は、多角的な分析を丁寧に行い、それらを総合して全体の説明力を高めている点にあると言えるだろう。

以上を踏まえて、審査委員会では、高く評価できる点がある一方で、一部の例文の分析における微妙な違和感があること、分析の観点や知見が広範である分、最終的にそれらを収束させて見通しよく整理する余地がまだあること、先行研究のうち、分析に直接貢献しないものにも詳しく言及している点が少なくないこと、など種々の問題点があるとした。しかしながら、口頭試問では、申請者が問題点の多くを認識していて今後解決すべきテーマとしていることが明らかになり、他の疑念についても回答できたことから、論文の評価を下げるほどの瑕疵とは言えないと判断した。査読論文 2 編や数回の国際学会発表を含む成果を積み上げており、先駆的な研究であることも評価に加えて、審査委員会では全員一致して博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論を得た。